

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
個人研究費
2010年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学部教授	河東 仁 印
研究課題	地域資源循環型インテンショナルコミュニティをめぐる調査研究	
研究期間	2010年度	
研究経費	498千円	

研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究は地域資源循環型インテンショナルコミュニティの分類、そしてそれぞれの諸特性の析出を最終目的としており、2010年度は、そのための基礎作業を2つおこなった。
 第1の作業は、日本国内に存在するさまざまなインテンショナルコミュニティを対象とする先行研究、および基礎データの収集である。
 第2は、国連の委託を受けてEDE(Ecovillage Design Education)を世界各地で展開しているGEN(Global Ecovillage Network)の手になる、コミュニティの持続可能性を評価するための指標CSA(Community Sustainability Assessment)の日本版の作成である。

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[持続可能性] [エコヴィレッジ] [スピリチュアリティ]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

これまで特定の地域やコミュニティの持続可能性の度合いを評価するためのツールとして、さまざまな試みがなされてきた。佐々木健吾(名古屋学院大学、2010年)等によると、古くはNordhaus and Tobin(1973)のMEW(Measure of Economic Welfare, 1973)や経済審議会 NNW 開発委員会(1973)のNNW(Net National Welfare)、Repetto等(1989)によるNDP(Net Domestic Product)、Pearce and Atkinson(1993)のWSI(Weak Sustainability Indicator)などがあり、最近ではEsty等(2005)によるESI(Environmental Sustainability Index)、同じくEsty等(2008)によるEPI(Environmental Performance Index)などがある。

そうしたなかでCSA(Community Sustainability Assessment コミュニティの持続可能性をめぐる評価指標)は、1995年にフィンランドにて開催された「エコヴィレッジと持続可能なコミュニティ」をめぐる国際会議にて、参加者たちによって、自分の所属するコミュニティの持続可能性について話し合い、さらなる展開を促進するための評価ツールを自分たちの手で開発しようと決定したことに始まる。そしてGENのアメリカ支部ENA(Eco-village Network America)がコーディネーターとして作成作業を進めるなかで、①従来の客観的な評価ツールとは異なったもの、ことに②既存のツールが環境や経済面からの評価が中心となっているのに対して、精神的・文化的な評価軸をも有したものの、③コミュニティの住民が主体となって評価を実施できるものにする、以上3点の基本方針が決まり、1999年に作成されたパイロット版をもとに世界10地域からのフィードバックを参照しながら、2000年に確定版が作成された。その具体的な内容は、GENの手で公開されている。(http://gen.ecovillage.org/activities/csa/English/)

日本においては、NPO法人サステナブル・コミュニティ研究所が、2003年に日本語化を試みている。また2004年には、(財)中郷地方総合研究センター『環境評価ツール(CSA)を活用した、循環型地域づくりの可能性』総合研究開発機構(NIRA)報告書が公開されている。後者は、広島県高田郡高宮町(現、安芸高田市)の川根地区と広島県山県郡加計町(現、安芸太田町)の川北地区の2地域を対象として、研究者が聞き取り調査するのではなく、2地域それぞれ9名のグループにて上記の日本語版CSAをもとに話し合ってもらおうというスタイルをとっている。また同時に、CSAの質問項目に対する吟味も依頼し、それを基に、単なる日本語版でなく、日本の文化風土に即した内容への改編も試みている。その意味で後者は、日本におけるコミュニティの持続可能性をテーマとする研究の歴史において、多大なる意義をもっていると言えることが出来る。

ちなみにCSAは環境面、社会・経済面、精神・文化面の3つの分野に関する評価指標をもつものであり、それらはさらにⅠ. 環境面の評価指標——1. 立地条件と自然保護のあり方、2. 食の自立度、3. 環境への負荷の度合い、4. 廃棄物、5. 水源、6. 排水、7. エネルギーの自立度、Ⅱ. 社会・経済面——1. 治安、2. 内部での情報伝達、3. 外部との情報のやりとり、4. 差異性への許容度、5. 教育、6. 医療、7. 経済的な自立度、そしてⅢ. 精神・文化面——1. 文化の継承、2. 芸術と余暇、3. 精神生活、4. 仲間意識のあり方、5. 問題解決力と復元力、6. 人生観・世界観からなっている。まさに上述したとおり、Ⅲの精神・文化面について重視している点が、CSAの評価ツールとしての一大特徴をなしている。

そして本研究では、これからさまざまな資源循環型インテンショナルコミュニティに対する本格的な調査を始めるに当たって、このCSAを主たるインタビュー・ツールとして用いることにしている。その理由は2つある。

まず第1に、確かにこの評価ツールは、地域ないしコミュニティのメンバーが主体的に話し合うために開発されたものである。だが視点を変えれば、半構造化インタビューを実施する際のツールとしても非常に有効なものとなるからである。実際、広島県の2地域で用いられた際にも、住民主体の話し合いを重視しつつも、半構造化面接の要素がかなりあったことが報告書から読み取ることができる。

第2の理由は、本研究では、かつて「コミュン」と呼ばれた共同生活型コミュニティをも対象としており、その多くは精神・文化面における特有の世界観や人生観を有している。そのため、さまざまな評価ツールのなかで、精神・文化面の評価指標を唯一もつCSAを用いることによって、有機農業とバイオマスプラントなどを組み合わせたトランジションタウン型など、「コミュン」以外のインテンショナルコミュニティとの相違を析出する上で、有効な手段となると考えられるからである。さらには持続可能性の高さにおいて、環境や経済的な要素に加えて、精神・文化的な要素がどこまで関与しているかという問題にも言及することが可能になるからである。

しかしその一方で、CSAを学術的な観点からの評価ツールとして用いた研究が上述の広島県における事例を除いて、管見の限りにおいて、未だほとんどなされていないことも事実である。その理由として想定されるのは、CSAが地域やコミュニティのメンバーが主体的に話し合うためのツールであり、量的調査には馴染まないことである。また現時点では、日本語化が不十分であり、ことにエコヴィレッジ特有の思考スタイルや観念をどのように日本の文化に合わせたらよいかという点が十分に検討されていないことも大きい。そこで本研究では、CSAの再翻訳、さらに日本文化特有の精神・文化的な指標について問う項目を増やすということを今年度において試みた。

研究成果の概要 (つづき)

もちろんその概要を、すべてここに記すことができない。そこで、スピリチュアル面のチェックリストのうち「人生観・世界観」について問う項目に的を絞って以下に記しておく。

A. この地域・コミュニティは、他者と触れ合いながら自分自身に責任をもち、自己の成長をはかるといふ生き方に対して、全般的に良しとする傾向がありますか？

— ほとんどの場合、良しとする(14)、 まあ良しとする(10)、 良しとする者は少ない(5)、 まったくいない(-3)

B. 異質な意見や人間をめぐる、それが地域やコミュニティの全波に及ぶ健全性や継続性にとって重要とみなされることがありますか？

— ほとんどの場合、そうみなす(14)、 そうみなすことが多い(10)、 そうみなすことは少ない(5)、 まったくみなさない(-3)

C. この地域・コミュニティは世界全体において如何なる位置にあり、如何なる貢献をしているかといった感覚を共有していますか？

— ほとんどの人は共有している(14)、 そうしたことを考える人は多い(10)、 そうしたことを考える人は少ない(5)、 まったくいない(-3)

D. 持続可能性という観念が地域やコミュニティのなかでどの程度まで受け容れられ、実際にも使われていますか？

— ほとんどの人が受け容れている(14)、 同意している人が多い(10)、 同意している人は少ない(5)、 まったくいない(-3)

E. 「私たちは自分たちよりも大いなるもののためにこうしている。」といった合意が、地域やコミュニティ内でどの程度まで形成されていますか？

— ほとんどの人は同意している(14)、 同意している人が多い(10)、 同意している人は少ない(5)、 まったくいない(-3)

以上が、オリジナルの CSA 日本語版の改訳である。そして既述のごとく実際に質的調査のツールとして使用する際には、以下の討議項目を追加して実施することにした。ちなみに CSA の特徴は、あくまでもそれぞれの項目について話し合うことを目的としている点にあり、そのためカッコ内にある点はあくまでも目安であり、100 点を満点としている訳ではない。

F. 土を耕す行為は単に体にとってよいだけでなく、自然や宇宙との関わりを深めるという意味があるという感覚を共有していますか？

— ほとんどの人が受け容れている(10)、 同意している人が多い(8)、 同意している人は少ない(3)、 同意している人はまったくいない(-3)

G. 効率性すなわち収穫量の多さなどの追求はちょっと脇に置いて、ゆったりとした生き方を大事にしたいという思いは、どの程度の人をもってありますか？

— ほとんどの人がもっている(10)、 もっている人が多い(8)、 もっている人は少ない(3)、 まったくいない(-3)

H. 次の事柄のうち、人生を豊かにする上で重要と思われるのはどれですか？ 当てはまるものを幾つでもチェックしてください。

— 自然とのつながり(2)、 神的存在とのつながり(2)、 伝統とのつながり(2)、 仲間とのつながり(2)

I. 他人より優れた存在になりたいという気持ち、あるいは自分は他人より劣っているのではといった気持ちは、話し合いのなかで抑えられるようになると思いますか？

— ほとんど抑えることができる(10)、 ある程度なら抑えることができる(8)、 ごく僅かしか抑えられない(3)、 まったく抑えられない(-3)

J. 他人より楽をしたいという怠け心は、話し合いのなかで抑えられるようになると思いますか？

— ほとんど抑えることができる(10)、 ある程度なら抑えることができる(8)、 ごく僅かしか抑えられない(3)、 まったく抑えられない(-3)

以上である。

等を記入した調書（A4縦型横書き1枚・自由様式）を添付すること。

（様式3）

立教SFR－個人－報告

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

- ①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
- ②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
- ④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

初年度のため、該当するものなし。